

平成 29 年度 川口市民大学

(3)川口の地域学講座 第 2 回 川口の自然と植物

元川口市文化財保護審議会委員 西川昭三

1.地形

川口市は台地と低地からなっています。台地は川口市の東部から北部にかけて大宮台地の鳩ヶ谷支台が北から南に伸びています。台地の標高は 15～20m です。火山性の灰が堆積した関東ローム層から成る洪積台地には多くの開析谷が発達し、複雑で変化に富んだ地形を形成しています。また台地の裾から湧く湧水は地形の変化と相まって生物にとって多様な環境を生み出し、多くの生物を育てています。低地は標高約 5m で市の南部の荒川沿いに広がる荒川低地と東部の綾瀬川沿いに広がる中川低地があり、自然堤防や後背湿地が見られます。低地は沖積層の未固結堆積物で形成されています。また大宮台地の鳩ヶ谷支台と浦和支台に挟まれた低地は見沼田んぼで面積は約 1260 ヘクタールです。川口市の領域はその 5%に過ぎませんが、中央を流れる芝川と両側を流れる見沼代用水の東縁と西縁と、更にその外側に続く斜面林は一体となって豊かな自然を作り出しています。

2.植生

川口市の自然植生は東北地方南部から沖縄まで続く、常緑広葉樹林帯のヤブツバキ域に属しています。具体的にはシラカシやスダジイを主体とする常緑広葉樹林帯ですが、古くから台地・低地ともに平坦部での利用が進み、現在では社寺林や屋敷林などとして小規模で断片的に残っているに過ぎません。

自然植生に代わって人の働きかけによって作られた植生を代償植生といいますが、これは市内では地場産業である植木産業のための苗圃が最も多く、畑やわずかに水田も含まれています。しかし野生植物の生育環境として重要なのは雑木林です。市内の雑木林は開発から取り残された斜面林として存在しています。斜面林を構成する高木はクヌギ、コナラ、イヌシデ、アカシデなどを主体とする落葉広葉樹林です。しかし長い年月放置されたために植物遷移が進み、シラカシ、スジダイ、アオキなどの常緑樹が成長しつつあります。雑木林の内部や周辺部には暖地性や山地性の貴重種が多く含まれています。高木ではアカガ

シ、ニガキ、キハダ、低木ではコクサギ、ハナイカダ、カラタチバナがあり、草本ではイチリンソウ、ヒトリシズカ、ツルニンジン、ウバユリ、マヤラン、ジュウニヒトエ、クマガイソウ、キンラン、ギンラン、サイハイランなどがあります。

草原にはキジムシロ、ナツドウダイ、ノジトラノオ、オオヒナノウスツボなど、湿地ではミズワラビ、ハンゲショウ、タコノアシ、ミゾコウジュなどが生育し、これらの他にも多数の種があります。特筆すべきは安行では湧水の流れにサワガニが生息し、オニヤンマが飛んでいることです。

川口市のもう一つの特長は帰化植物が増加していることです。荒川堤防のように外来牧草の吹付地はもちろんのこと、見沼田んぼのアシ原にも、乾燥化に伴ってセイタカアワダチソウが繁殖しています。さらに乾燥した場所ではオオブタクサで埋め尽くされています。ツルドクダミ、アレチウリ、セリバヒエンソウ、コセンダングサ、アメリカオニアザミなどが生育地を広げています。

3.一輪草

平成7年に道の駅「川口・あんぎょう」の開設に伴う周辺整備の一環として安行地区の植物調査が行われました。この時「安行赤堀用水沿い斜面林保全緑地」の中にイチリンソウの群落が発見されました。平成9年に「安行みどりのまちづくり協議会」が結成され、斜面林の本格的な保全活動が始まりました。イチリンソウは次第に増え、訪れる人も多くなってきました。平成14年には川口市が学術的な価値を評価して「安行原イチリンソウ自生地」として、天然記念物に指定しました。そして平成16年には自生地1050㎡が埼玉県と川口市によって公有地化され、平成18年には第1回の「一輪草祭り」が開催されて、斜面林にケーナ、尺八、琴の音が響き渡りました。現在では安行の春のイベントの一翼を担っています。

そして平成20年には「保全緑地」の隣接地が川口市によって公有地化され、「万葉植物苑」として整備が進められ、平成21年4月に万葉植物140種を集めて開苑しました。これによって安行地区には植木産業の緑と斜面林の自然の緑、そして万葉集に詠まれた心の緑がそろったこととなります。現在では、雑木林を含むこの地域は地元小学生の自然体験や環境学習に利用されるようになり、また中学生がボランティア活動を行う場ともなっています。

また川口市内で開発などにより絶滅の危機にある植物をこの地に移し、安住

の地とすることも活動の一つです。これまでにニリンソウ、ウバユリ、ウラシマソウなどを移しました。イチリンソウの自生地を基点とした地域の人々の活動や思いはいろいろな形で周囲に影響を与え、新しい出会いや関係を生み出しています。

その一つとして、地元公民館で俳句クラブを主宰しておられる加藤良江さんが発表した創作民話「一輪草物語」を掲載します。

一輪草物語

加藤良江

昔々、一輪草が大好きな「りん」という美しい少女がおりました。四百年ほど前の安行村はとても貧しい農村でした。村には斜面林があり、ぶなやならの木の下に、春になると一面に一輪草が咲きみだれるのでした。

ここ数年間台風や長雨、そうかと思えばひでりが続き、米や野菜は凶作でした。凶作の翌年には江戸から人買いが必ず来るのです。年貢を払うために娘を売るのです。その人買いは、辰といってこの村の人だったのですが、辰が小さい時に両親が死に、手のつけられない悪たれとなり村を飛び出して、何年かたち人買いとしてやって来たのです。村の人達はあの辰が来たとき大変おそれていました。辰は辰で「貧乏人の人助けをしてやっているのだ、文句があるか」と凄むのでした。

人買いの辰にも、誰にも言えない秘密が一つありました。辰が、春やって来る理由もあったのです。辰のおっかあは一輪草が大好きでとても優しいひとでした。辰が小さい頃おっかあは辰をおんぶして、一輪草を見に行きました。あの頃のおっかあの背中の温もりと一面の一輪草が臉に焼き付いているのです。大好きなおっかあも、ちゃんも、辰が物心つくころには、はやりやまい流行病で死んでしまいました。

三年続きの凶作に、りんも売られてゆくことになり、ちゃんもおっかあも「りん、すまねえ五年辛抱してくれ」と涙ながらに詫びるのでした。人買いの辰は、大声で「おっかあよ、いつまでも泣いているんじゃないよ」とりんをせき立てます。りんは「おっかあ心配するな、おらちは一生懸命働いてきっと五年で帰って来るから」とまだ数え年で十歳というのに、きっと辰をにらみつけ、振り

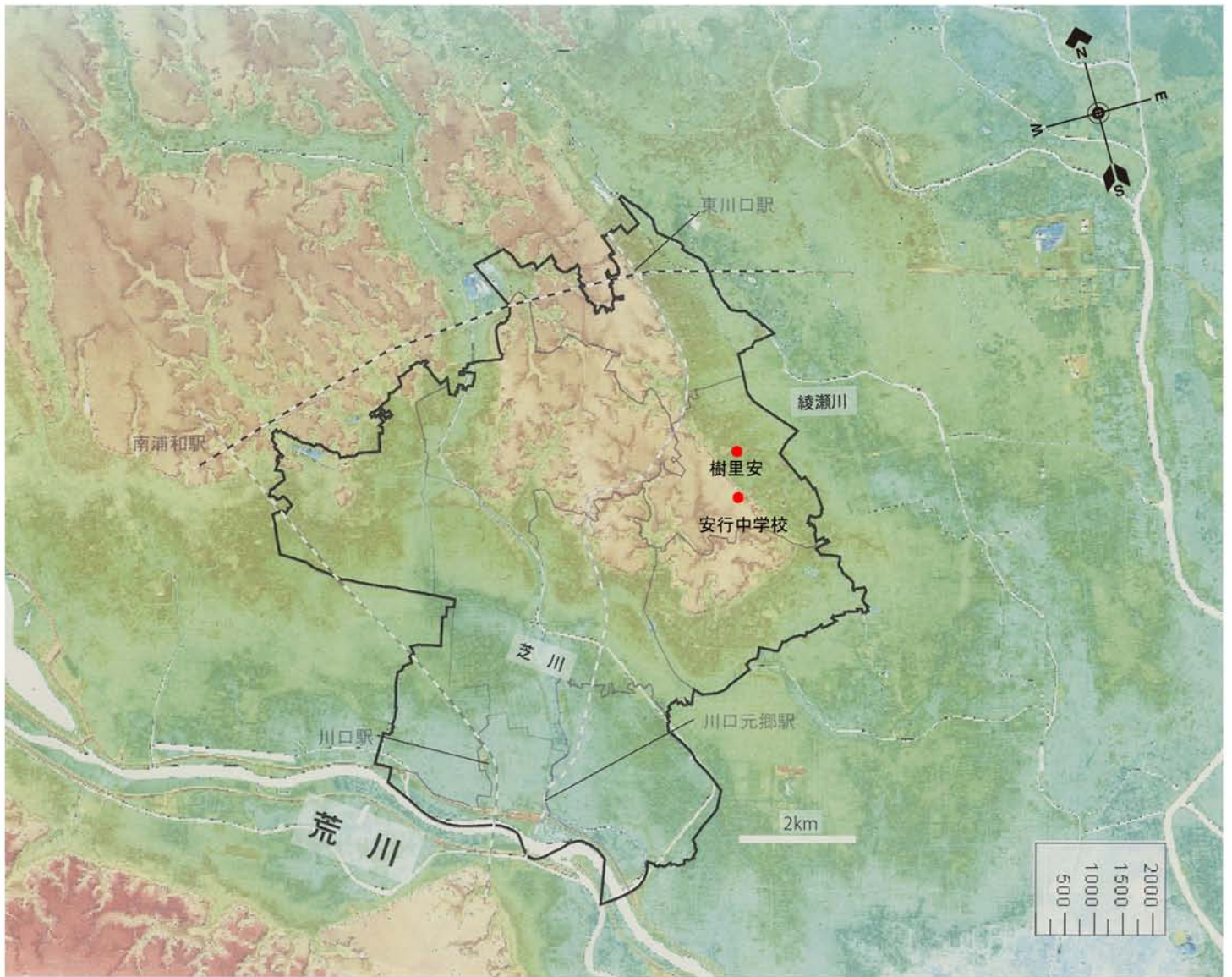
向きもせずに歩き出しました。しばらく歩いてりんは、もじもじしながら「人買いの辰よ一つたのみがあるんだ」と言うのでした。辰は「小っちええあまに
しては、度胸がいいじゃねえか。人買いの辰にたのみ事をするなんざ、聞いて
やろうじゃねえか」と辰はにやにやしながらかがみ、りんの頬っぺたをつねり
ました。「江戸に行ったら安行の一輪草は二度と見られねえかも知れねえ。だか
らお願いだ。おらちの好きな一輪草を見てゆきてえんだ…」と、りんは辰をじ
っと見上げていいました。「おめえも一輪草が好きなのか」と辰はりんを見つめ
ました。「辰っあんも好きなのか」と少し安心しました。辰は見すかされた心を
とりつくるおうと顔を真っ赤にして「うるせえ。あんなちっぽけな花なんてで
えきれえだ」とうそぶくのが精いっぱいでした。

それから十年の歳月が過ぎました。りんは村に帰ってくることも無く、風の
うわさではりんによく似た女郎が投げ込み寺に投げ込まれていたとか。そして
数年の歳月が過ぎた春のこと、今年も斜面一帯に一輪草がみごとに咲きました。
安行村の一輪草の花野の片隅に一心に経をととなえて足早に立ち去る旅の僧をみ
かけたとか…。

歴史の襞の中に埋もれ忘れさられたお話です。



安行原のイチリンソウ



基盤地図情報(国土地理院)より、カシミール3D (DAN杉本)で作成



イカリソウ



ノキシノブ



ヤマトリカブト



ヤブミョウガ



ホウチャクソウ



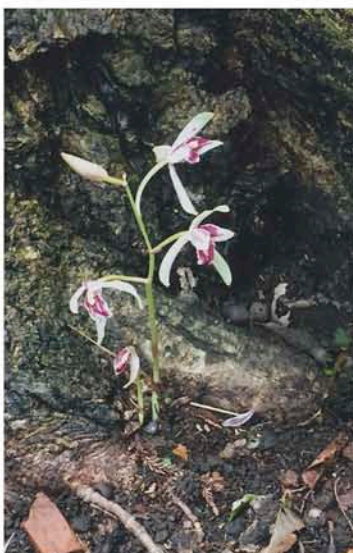
ウラシマソウ



ウバユリ



サイハイラン



マヤラン



ジュウニヒトエ

